

読書のまち・かわさき通信NO47



読書のまち・かわさき

読書のまち・かわさき事業推進委員会 会長
川崎市教育委員会 学校教育部 指導課長

2010. 4. 16発行

本との出逢いを“デザイン”するって？

～「子ども読書の日」に寄せて～

先日、あるラジオ番組の中で行われていた対談がとても印象的でした。

ゲストは、ブックデザイナーという職業を行っている男性です。対談を聞いているうちに、東京にある『ブック246』や『TSUTAYA東京六本木店』などをプロデュースしている人物だとわかりました。また、ブックデザイナーという仕事が、**本と人との出逢わせ方をプロデュースする仕事**だということも理解できました。



対談の逸話の中で、『ブック246』という店のことが引用されました。「旅」をテーマにした本と旅心をそそるトラベルグッズの専門店だということです。印象深かったのは、「選書」の視点、つまり、人と本との出逢わせ方に話が進んだ時でした。例えばこんな例を思い浮かべてください。「**東北地方への旅**」という大きなテーマがあったとします。コーナーに近づいてみると、「**宮澤賢治と対話するための旅にもっていくこの20冊**」なんていう出逢わせ方で、人と本をつなげていくというのです。そのそばに、宮澤賢治も旅に愛用したグッズ紹介のコーナーをさらに設けることで、ひとつのことから様々な広がり、つながりがうみだされていく醍醐味を味わうことができるというのです。本棚に本が確かに存在していても、通り過ぎてしまうことはたくさんあるはずですが、それを通り過ぎずに出逢わせるための工夫をデザインすることが、「**選書デザイン**」だということです。



さて、先日、川崎市内の市立図書館に足を運ぶと、『**キックオフ！ “読書のまち・かわさき” 川崎フロンターレ2009年の15冊**』という8ページの小冊子が目に飛び込んできました。8人の選手が15冊の本を紹介している冊子ですが、その紹介の仕方は、小学生の皆さんにも活かせるように思えました。そして、本の紹介の仕方それ自体も、先述の「人と本の出逢わせ方の工夫」のひとつだと言えます。そのアイデアをここで少し紹介しましょう。^{ちよんてせ}鄭大世選手が、^{さいとうたかし}齋藤孝さんの書いた『読書力』を紹介しているので、少しだけ例に挙げてみることにします。“私を変えたこの一冊”というキャッチフレーズに続き、次のような紹介文が綴られています。「成人した時に祖父から

送られた一冊です。これをきっかけに読書量が格段に増え、読書に対するモチベーションが上がりました。若い人、特に十代の人にはこれを読んでから読書の世界に入ることをおすすめします。さらに、主人公や著者などの印象的な言葉が引用されながら、本の内容についての簡単な説明が書かれていきます。このような内容が、どの選手も200字程度で綴られるのです。“〇〇の一冊”というキャッチフレーズがいいですね。他にも、『マジで泣いた一冊』、『気持ちを落ち着かせたい時に読む一冊』というのもありました。そこで、ふと、ひらめきました。『旅にもっていくこの一冊』、『無人島にもっていくこの三冊』、『映画化されたこの五冊』等々。そして、本の中の大好きな一節や言葉を引用し、大きく書き抜きした後に、感想や意見を綴ってみたら、一味違う「本の紹介文」ができるかもしれません。

4月23日は「こども読書の日」

今月23日は、本にかかわる日として、実は、とても重要な一日なのです。

その①「世界本の日」

1995年フランスのパリで開かれたユネスコ総会という国際会議の中で、4月23日に行うことが決まりました。

その②「サン・ジョルディの日」

悪魔のいけにえに差し出された王女を助けた伝説の騎士で、スペイン・カタルーニャ地方の伝説です。この勇敢な騎士が亡くなった日が23日なのでそうです。そして、いつのまにか本と花を贈り合って家族や、友人、恋人同士が愛する気持ちを伝え合うようになりました。

その③「子ども読書の日」

2001年に定められた「子どもの読書活動の推進に関する法律」によって、決められました。



ちょっと一息詩をどうぞ

うそをついた日

神様。

わたしが うそを ついた日を

「うその日」として祝日になってくれろ。

そつすれば

みんながよろこぶと思います。

そつすれば

わたしが あんしんできます。

糸井重里さん

糸井重里詩集『詩なんかしらないけど』

(大日本図書)